

ベリーショート賞

誰かが僕を殺じた 武藤 茂

空が晴れている。雲が東へ流れていく。ハトが羽ばたいて、電車がホームに進入してくる。そして、僕は死ぬ。春が近い。線路の向こう側で老いた桜の木が蕾を付けている。踏切で遮断機が鳴っている。そして、僕は死ぬ。

駅のアナウンスが流れていた。

「回送電車が参ります。危ないですから黄色い線までお下がりください」

僕の両脚は凹凸のある黄色い点字ブロックのラインを大きく踏み越えていた。上体が傾いて、軽石を敷き詰めたレールが迫ってくる。電車が警笛を鳴らし、強いブレーキによる甲高い摩擦音が響いている。四角い電車の顔面が迫り、ガラスの向こうで運転手の慌てる顔が見えた。ああ、僕は死んでしまうのだ。

しかし、なぜ僕は駅のホームに飛び込むのだろう。確かに年頃の青年相応の悩みを抱えていたが、それは思いつめて死に至るものではなかったはずだ。

つまり、僕は殺されたことになる。もちろん、こうして物事を考えている今現在の僕は生きているが、カンマ数秒の内に死

は確実に訪れる。

それはひどく容易なことだ。背中を一押ししただけで、僕を殺すことができたのだ。誰にでもできる。不安定で、脆弱な僕の命。

では、誰が僕を殺したのだろうか。朝のホームはひどく混雑していた。通勤通学の会社員や学生、その他大勢の全てが被疑者なのだ。犯人はその人混みの中に消えてしまう。

低い朝日の白い光が電車の窓に反射して、僕の目を眩ませる。きつと、僕の目はもう世界を捉えることさえできなくなったのだ。白く温かな光の中に僕の身体は沈んでいった。

走馬灯とは氾濫する映像のようなものだと思っていたが、実際にそうではない。それは静止画のように微動だにせず、淡々と記憶の断片を映し出すのだ。時間軸を無視して、画像と音声もリンクしていない。おそらく、視覚的情報と聴覚的情報を別々に記憶して、別々に再生しているのだ。

加えて、走馬灯は人生のダイジェストでもなかった。現われる情報はごく最近のものばかりで、ここ一週間の出来事だった。

と気付いた。奴とは一年からの付き合いである。バカな話ばかりして、バカなことばかりしていた悪友だった。

そう言えば、今朝も僕は奴のマンションへ行つたのだ。それは駅へ向かう途中にある。インターホンで2回鳴らし、電話を十コール分かけたが、奴は起きてこなかった。

奴には慢性的なさぼり癖があり、自発的に起床することは不可能に等しい。僕は気分が良い朝のみ、奴をこうして起こしてやることにしていた。

もっとも、これで起きないようであれば、情け容赦なく僕は奴を置いて大学へと向かう。今日もそのパターンだった。

急に音声で砂嵐のように濁りだした。しかし、画像ははつきりと映されたままだ。

イチヨウ並木を老婦人が犬を連れて散歩している。穏やかな小春日和に、ジョギングをしている中年男性がいる。先週の水曜だ。

「殺してやる」

砂嵐の間を突いて、背筋が凍るような低い男のつぶやきがあった。それはこの光景にあまりにも似つかわしくなく、そして僕に恐怖を植え付けた。まるで僕の耳元で囁くようだ。

この男が僕を殺したのかもしれない。この言葉は僕が死ぬ直前に聞いた言葉ではないか。だからこそ、このようにノイズが入ったのではないだろうか。

そんなことをいちいち覚えて生きている者などいないはずだ。僕も例外ではない。ただ死に瀕した今だけ、そんな些細な物事を知ることができないのだ。

「そんな訳あるか、考えすぎだろ」

突然若い男の声がした。画像は自分の住むアパートで、外は夜のように暗かった。

「いや、騙されんぞ。今に出てくる」

今度は僕の声である。誰かと交わした、いつかの会話なのだろう。それはわからないし、とにかくこの画像と関連はない。

「おいおい、やめてくれよ」

これも先ほどの男の声だ。二度目にして、これは祐一の声だ

僕は何とかして、この殺人犯の姿を見ようと試みた。犯人は今も僕の背後に立っているはずだ。振り返ることさえできれば、わけなく見ることができよう。

しかし、時間が動き出した途端に僕の身体は電車に粉碎されてしまうのだ。

そこで僕は犯人の手掛かりを記憶の中から探すことにした。死ぬ直前に見た光景は、今も網膜に焼きついているはずなのだ。問題は、記憶の再生は完全なランダムになっていることだ。僕がいくらその画像を欲したところで、出現するものではない。

僕はただその画像の出現を待った。何枚もの記憶のカケラが眼前に現れては去り、やがてその時は来た。死の直前だ。僕は画像が移り変わってしまう前に、犯人を見つけようと眼を凝らして隅から隅まで見回した。

その画像の視点は駅のホームから線路に向かってやや俯いていた。右手に握られた小型音楽プレイヤーに焦点があっている。視野は狭く、端部はぼやけている。

僕は眠いときには、いつもその機器を使って音楽を聴いていた。ぼんやりとした脳を揺さぶるように、大音量でロックを聴くのが好きだった。そして、今朝もそうだった。

はつきりいつて、こんな画像から犯人の手掛かりが得られるとは思ってもみなかった。黒色のディスプレイは、薄らと鏡のように背景の一部を映し出している。そこに、スポーツキャップを深く被った男が映っていたのだ。

意識は再び線路の上に戻る。

いよいよ、死ぬのだ。親友に裏切られ、絶望に打ちひしがれて、世界が動き出す。

電車のフロントガラスには、もはや祐一の姿がはつきりと映っている。奴は右手を突き出したまま、僕の立っていた場所にいる。奴が今どんな顔でいるのか、わからない。

今朝、奴は僕が起こしに行っても玄関に出てこなかった。電話にも出なかった。僕を殺す機会をうかがうためだったのか。(今朝?)

僕は自分の中にもう一つの今朝が存在していたことに気付いた。いや、あれは昨日だ。昨日の僕は祐一を起こすことができず、一人で学校に行き、その帰りにレンタルショップに寄って、奴の家に行ったのだ。そして、徹夜でドラマを見た。朝になると、僕らは二人で部屋を出たのではなかったか。

どうやら徹夜のせいで、時間感覚が狂っていたようだ。走馬灯の幻も、強烈な眠気から生じた白昼夢だったのかもしれない。耳元で、大音量のロックが流れている。考えてみれば、この状態で男の低い囁きが聞き取れるわけがない。あれはドラマのセリフだ。

つまり、僕は不養生のために目眩を起こしただけなのだ。殺人事件でもなんでもない。ようやく、僕は現状を理解することができた。もっとも、それはあまりに遅すぎたが。

(祐一、笑ってくれよ。普段は親友面しておきながら、死に

その身から溢れる怪しさから、僕はいつか犯人だと確信した。僕を殺すために帽子を深くかぶっているのだと信じた。「悪いな、こういう商売なんだ。怨むなよ」

祐一の部屋の画像が現れた。床に雑誌類が散乱し、缶ビールの空き缶が転がっている。僕と祐一はスナック菓子をつまみにして、レンタルDVDを観賞していた。こんなシチュエーションを男同士で練り広げているのはなはだ遺憾であるが、僕らはどうしようもなく異性に対して孤独だった。

モニターに映るのは流行りのサスペンスドラマで、公安組織を指揮する主人公が、異常者が引き起こす事件と対決していく話だ。

レンタル代は折半している。せこいようだが、シーズン2まで一度に借りるとそれなりの額になる。金は無いが、時間は腐るほどあった。僕らは寝る間も惜しんで、画面を見つめていた。つい昨日のことだ。

その時、僕は壁際を凝視した。スポーツキャップがかかっている。僕を殺した犯人が被っていたものと全く同じだった。虚ろな眼でモニターを眺める祐一の姿に、僕は強い恐怖と怒りを覚えた。

(祐一、なぜだ?)

ここで、永遠に続くかに思えた走馬灯が突然途切れた。僕の

際にはお前を殺人犯だと疑って、間抜けに死んでいく男を)

僕はゆっくり眼を閉じた。涙が溢れた。

電車が鼻先をかすめて通過していく。愛用の音楽プレイヤーを粉碎し、イヤホンも飛んでいった。プレーキ音が響いている。ホームは騒然となり、駅員が人混みを割って駆け寄ってくる。茫然とする僕の左手を、祐一の右手がしっかりとつかんでいた。